

序

望月昭先生には、2016年3月をもって定年の期を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の積年のご功績を称え、深い感謝の意を表すため、ここに退職記念の論集を編み献呈させていただくこととしました。

望月先生は、1974年3月に慶應義塾大学文学部心理学専攻をご卒業後、同大学社会学研究科心理学専攻修士課程に進学し、1979年3月に博士課程を単位取得退学されました。その後、同年4月より1983年3月まで同大学文学部心理学専攻の助手として、また1983年より愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所研究員・主任研究員として勤務された後、1998年4月には立命館大学文学部心理学専攻に教授として着任されました。そして、2001年からは先生が創設にかかわった応用人間科学研究科にも所属されることとなり、これまで18年にわたり本学の教育・研究に尽力されました。その間、2001年には博士学位（心理学）を慶應義塾大学より授与されております。

ところで、先生が着任されて間もない頃から、文学部は一連の学部改組に取り組んできました。先生の着任当時、哲学科内に設置されていた心理学専攻は、2001年4月より心理学科として独立し、そして、2004年には心理学を除く4学科が人文学科に統合されたことにより、文学部は人文学科と心理学科の2学科体制をとることとなりました。次いで、2006年4月からは心理学科心理学専攻も人文学科に編入され、さらには2012年4月より文学部人文学科が学域－専攻制を導入したことにより、心理学専攻は心理学域心理学専攻として位置づけられることになりました。このような改組改革の波にもまれながらも、心理学専攻は教学組織としてゆらぐことなく、むしろ〈立命館心理学〉の変身を自ら演出し、体現してきたと言えましょう。その中心的役割を果たされたのが、望月先生であったことはあらためて述べるまでもありません。

〈立命館心理学〉の特徴は、実験心理学・発達心理学・社会心理学という基礎的領域でのたゆまぬ教学と研究の成果をふまえつつ、日本有数の応用・臨床心理学の拠点を築きあげてきた点にあらうかと思われます。その中であって特筆すべきは、望月先生が、長年の現場経験にもとづいて〈対人援助学〉という新たな研究と社会実践の地平を切り拓かれた点にあります。その〈対人援助学〉は、〈立命館人間科学〉の創造を企図して新設された独立大学院応用人間科学研究科におけるコア領域として位置づけられ、先生は心身障害者のケアにたずさわる数多くの社会人の指導に多大なる貢献を果たしてこられました。

他方、望月先生は教学・研究のみならず学内行政にも尽力され、応用人間科学研究科の初代研究科長および人間科学研究所長、また衣笠研究機構副機構長など数多くの要職を歴任され、学部・大学院・全学の発展に貢献されました。さらには、本学において初めて設置された「衣笠人を対象とする研究倫理審査委員会」および「全学研究倫理委員会」の立ち上げと運営にも寄与されました。これらのことは、先生の厚いご経験と高い見識、そしてその類まれなる統率力

が、いかに高く評価されてきたかを物語っていると言えましょう。一方、障害者の就労支援など＜対人援助＞に関する研究と実践を追求されてきた先生は、学界および地域社会でのパイオニア的役割を果たされ、対人援助学会会長、行動分析学会常任理事を務められるなど数多くの学会で活躍されるとともに、地域社会との連携にも積極的に関わり、守山市自立支援法障害区分認定会議会長、京都市北総合支援学校学校運営協議会委員長等の要職を担われました。

文学部心理学専攻は2015年度入試をもって募集を停止し、2016年4月より同専攻を母体とする総合心理学部が大阪いばらきキャンパスに新設されることになっています。こうした重要な節目に、先生がご定年を迎えられることはまことに残念でありませんが、文学部教授会は、永年のご貢献に謝意を表するため、来る4月1日付で先生に名誉教授の称号をお贈りするよう手続きを進めているところです。今後とも、わたくしども後進を見守り、文学部および総合心理学部へのご助言を賜ることができますれば幸いです。

2016年1月25日

立命館大学人文学会会長

文学部長 藤 卷 正 己